

「ピカピカ光るおじさん進んでる？」

と、今夜の夕飯の支度をしていたら、仕事から帰ってきた妻が家のドアを開けながら聞いてきて、それがなんの事だか一瞬わからなかったけれどもすぐに思い出し、

「ああ、まだ何にも書いてないよ」

と答えると、妻はその間にくるぶしくらいまでの長さの短いクリーム色のブーツを脱ぎ終え、とんとんと音を立てながら歩いて行ってベランダのある側の窓際に靴を置き、部屋着に着替え始めていた。家は駅前によくある、一階に店舗が入っていて上の階がアパートになっているビルで、四階建ての最上階に部屋がある。建物が細長いから各階に一部屋しかなくて、ビルの形そのまま、二十五平米くらいの縦長の部屋で、玄関のドアを開けるとすぐにキッチンになっている。一昨日の夜、この小説のタイトルについて相談していた時に、妻は

「『ピカピカ光るおじさん』がいいんじゃない？」

と確か言っていて、「ピカピカ光るおじさん」というのは工事現場によく設置されている、ヘルメットで作業着姿のおじさんがピカピカ光って謝っている電光掲示板のことで、

「ああ、なるほどね」

と相づちをうったが、なんでそんなタイトルを思いついたのだろうか。聞きそびれた。それにまだ何を書くかも決まっていないのにタイトルだけ先に決めるつもりだったのだろうか、と思いつながら、片栗粉をまぶした鶏の胸肉を皮のついてる側からフライパンで焼き色がつくまで炒め、しめじを加えてさらに数分炒めてから粉末だしと水、酒を加えてざく切りにしたキャベツを入れてさらに数分煮込んだ。そうして出来た鶏肉とキャベツの炒め物と煮物のあいのこみたいな適当な料理を大きな皿に移し、ラップに包んで一食分ずつ冷凍していたご飯を電子レンジでチン。

一昨日、この小説について妻と話をしながら全体の構想をなんとなく考えていた。確か、なんとなく二部構成にしようという事だった。というのも初めて小説を書くとなると、その文体や内容を、よくいえば実験的、悪くいえば未完成というか、そういうものにしてしまいたいような気がしていて、最初の一部でそういった事をやりつくそうと考えていた。しかし結局のところ二部構成にはせず、一度書いた文章と同じ内容を平坦な文章で書き直すという方法で対処というか、うやむやに薄めるような方法でひとまず進め始めていた。といつてもまだここまでで千文字にもなっていない。

夕飯を食べ終えたあと、ベッドの上にノートパソコンを置いて小説を書き進めていた。こうして、ベッドでうつぶせでずっと書き進めていると腰が伸びて痛くなってくる。妻も隣でノートパソコンを置いて自分のホームページを更新していた。妻とは手続き上、婚姻届を出すことで結婚したことになるわけだが、実際にはそれ以外にも様々な手続きが結婚に際して必要になってくる。結婚したのはもう一年以上前で、細かいことはぼんやりと

忘れてしまったが、住民票や健康保険などの変更で何度も区役所に足を運んだ事は覚えて  
いる。名字が変わった妻の方は、そのほかにも銀行口座や免許証の名義変更が必要で、一  
つその名義を変更するたびに

「あたし谷口になったんだね」

とか、

「あたし谷口になったんだよ？」

と確認するように言っていた。明日は土曜日だったので、ふたりはいつもより遅くまで起  
きて、インターネットをしたりして、いつの間にか寝てしまって、もう太陽が昇りきって  
明るくなつたころに起きた。

「ピカピカ光るおじさんって、電光掲示板じゃなくて、ほんのおじさんのことなんだけ  
ど」

「あ、そうなんだ」

「あのピカピカひかるベストみたいなの着てて棒振ってる人のこと」

「あーそうだったのか」

「そうそう」

「名前は本当にそんな感じで、あたし会社だと内田のまままで、さつきみたいにお店の予  
約とかとるときは谷口じゃん。だからこう、アイデンティティがゆらぐみたいなの」

「おー」

日曜の朝、道路に面した窓側にある小さな机で谷口は小説の続きを書いていた。谷口より  
も先に起きた妻は、洗濯機をまわしたり食器を一通り洗い終え、今は朝食のホットケーキ  
を焼いていて、甘い匂いがする。先週は忙しくてすっかり間があいてしまった。昨日は大  
学の授業の準備をしながらビールを飲み始めてしまって、授業の準備も、小説もあまり進  
んでいない。谷口はme制作会社に勤めながら、美大で非常勤講師をしていて、授業では  
Max/Mspというプログラミング環境について教えているのだが、このソフトのライセンス  
スが切れてしまっていて、購入すればいいのだけれども、三万円もするソフトを買うこと  
の抵抗感と、教員割引で買うための手続きの煩雑さから、結局いつもこうしてOS<sup>1</sup>と再  
インストールして三十日間の体験版をインストールしてしまう。バックアップをとって、  
OSのディスクから再インストール。これだけで半日すぎてしまうし、インストール中の  
待ち時間にビールを飲んで寝てしまつたら、さらに半日すぎてしまう。そうして土曜日を  
過ごしてしまったので今日は作業がある程度すすめなければならぬのだけれども、こう  
いう日に限って天気がよくて困る。先週の日曜も天気がよくて、買い物に行く途中少し遠  
回りして中野通りに出て、ちょうど満開の桜を見てきた。通り沿いに中野の駅前まで  
ずーっと桜が満開で、昨日は雨だったけれども、同じように遠回りして見に行つてみたら  
桜はもう半分は散ってしまつて、枝の先のほうから明るい緑色の葉に置き換わつて、そこ  
らじゅうにべつたりと花びらが散らばっていた。

キッチンに様子を見に行くと、湯をはった茶碗に白く濁つたハチミツのボトルが浸かつて  
いた。

「固まっちゃったの？」

「そう、なんか固まっちゃった」

冷蔵庫に入れていたらハチミツの糖分が結晶化して白く濁ってしまった。ホットケーキは二枚の皿にそれぞれ重ねて置かれていて、最後の一枚が焼けたところで谷口は皿をリビングのちゃぶ台に運んだ。

「まだ中までちゃんと火が通ってないかも」

「じゃ電子レンジでチンしちゃいなよ」

「あ、そか」

妻が言うほどには生焼けではなかったのですが、熱湯で柔らかくなっていたけれど、まだ結晶が残っていて白く濁ったハチミツをにゆるにゆるとかけて食べた。ホットケーキは結構量があつて、食べ終わった頃には二人とも少しぐったりしてしまった。

食器をキッチンに置いて、一息つくると妻は机でゴールデンウィークにコミティアという同人誌の即売会に出す本のためのイラストを描き始めていた。「おぼけちゃん」というキャラクターの絵で、もともとは別のイラストの背景のパターンみたいなものだったのだけれども、谷口がそれを見て

「それ、目をもうちょつとはつきり描いたら？」

と勘違いしたところからキャラクターになった事をいま書いて思い出した。谷口は何度か、そのキャラクターを見て

「なんでそれおぼけちゃんって言うの？」

「んーなんとなく？おぼけちゃんっぽいじゃん」

と、妻と話していたが、この「おぼけちゃん」というキャラクターは、背景の模様から浮かび上がってきた、まさにおぼけというか、心霊写真のような出自のキャラクターだったわけだ。なるほど。へえ。

今日は朝から天気がよくて、twitterのタイムラインを見ているとどうやら友人たちは花見をしていたのだけれども、自分は家で引きこもって作業してるものだからどんどん気分が減入ってきてしまって、結局小説はたいして進まなかったが、今週の夕飯のために大きな寸胴鍋で手羽先と大根の煮物を作って、その作業に没頭できたせいかな、少し気分はまぎらわされたし、水曜日あたりに食べた、三日目になったその手羽先と大根の煮物はすっかり味がしみ込んで、角がとれたしよっぱさになっていて、鍋に敷き詰められた、まだ煮始める前の真っ白な大根の様子を遠くの方で思い出したりもして、そのときの嫌な気分なんてすっかり忘れてしまっていて、そういう風景とか光景というか、場面のようなのを、映像や写真のように覚えてしまうことがあるけれども、その時の気分とか気持ちのよさうなものは、映像のようには覚えていないし、そもそも思い出すことができないんじゃないかと思つた。

次の日曜日、久しぶりに荻野と慎平くと昼から飲みに行った。二人は大学時代からの友人で、谷口は情報デザイン学科だったが、荻野と慎平くんは油画科で、大学一年の時に受けていた、現代美術の共通科目で知り合った。毎回、授業が終わった後に講師が黒板に今週末にあるイベントとか展示の情報を書いていて、黒板の前や教壇のまわりに学生が集まって、その内容をメモしたり、チラシをもっていたりして、そのなかに谷口もいて、偶然隣に立っていた、長髪を後ろで結んで、細かいけれど少し骨っぽいガタイで、トカゲとか、爬虫類みたいな雰囲気のものやつに

「このアーティストって有名なの？」

とか、そんな感じに声をかけて、荻野と知り合った。慎平くんは荻野と予備校時代からの友人で、確か荻野から紹介されて知り合ったのだと思う。慎平くんもそのときは長髪で、荻野のように後ろで結ばず真ん中分けで、ちよつと近付きがたい暗さと、不潔とはちよつと違う独特の汚さみたいなものがあって、なんとなくCDのジャケットとかで見っていたエイフェックスツインに似ていた。二人とも二浪してるから谷口より二歳年上で、美術や思想、音楽や映画について、ちよつと異常なくらいに詳しくて、だからというわけではないけれど、少し卑屈で理屈っぽい感じもあって、二人のように本を読んだり、映画を見ることが出来るようになったわけではないが、大学で受けた授業なんかよりもおおきな影響を二人からうけたし、尊敬というのは大げさだが、そういつた美術とか映画についての見方とか、意見は信頼できるものがあると思っていて、よく一緒に放課後に話し込んだり、飲みみにいたりもしていて、大学を出た後も、二人を含めた友人たちと聖蹟桜ヶ丘にアトリエを借りて、作品を制作したりしていたが、だんだんみんなアトリエに来なくなつて、以前よりもやや疎遠な感じになつてしまつた。美大を出た後も作品を作り続けることが別に重要だとは思わないし、作品を作る事よりも面白く、豊かで、特別なことは、単に普段の生活の中にもたくさんあるというか、作品を作る事とか、そこに費やす時間というのは、生活という大きな持続の一部でしかないと思つているから、二人が作品を作らなくなつたことは、単に生活とか環境が変わること、例えばちよつと遠くに引越したとか、自炊をあまりしなくなつたとか、あるいは逆に自炊をするようになったとか、そのくらいの変化だと谷口は思つているが、それでも荻野と慎平くんの絵画や彫刻やパフォーマンスの新しい作品が見れなくなつてしまつたのは残念だつた。二人とも、今でも展示を見に行つたり、評論を読んだりして、美術や映画に誠実に接して、真剣に考えているのだけれども、だからこそ自分の作品を安易に作れなくなつたのかもしれない。

その日は日曜だつたし、なんとなくもしかしたらまだ桜が咲いてるかと思つて昼から飲みもうと約束していたが、結局桜は散つてしまつていたし、天気もあまりよくなかつたので思い出横丁の近くの「やまと」で三時くらいから飲み始めた。やまとのれんをくぐつて中にはいると一階の席は半分くらいうまつていた。ひとまず席について飲み始めたのだけでも、荻野は二日酔いで最初は緑茶を頼んでいて、慎平くんもお腹がすいてるからご飯ものを食べてから飲みたいと緑茶を頼んでいて、谷口だけ緑茶を頼む理由もないし、もう飲む気でいたから少し拍子抜けした感じでひとまずビールを頼んだ。

「夢って、みんなが思ってるようなランダムにイメージが連なるって感じじゃなくて、相当論理的、言語的に出来てるんだよね。そういうルールみたいなものが働いてる。ただ、それが目覚めている時の論理とまったく異なっているからランダムに見えちゃう。つてか目覚めてしまうからそう見えちゃうんだよね。単に夢の中にいれば、夢の中の出来事は必然として理解できるというか、疑問をもつとか相対化する余地がないでしょ」

もう二週間も前のことなので、結局昼の三時から夜九時まで飲んでいた間で谷口がよく覚えてたのは、慎平君がここ数年ずっと興味を持っていて度々話してくれていた、夢や、夢の中で目覚める明晰夢という現象についての話だ。なんというか、作品を作るときには、全く何にもない状態から始まるというのではなくて、何らかの道具とか素材があつて、それらを一個ではなくて、二個以上を組み合わせるような、コンポジションとかカラージュのような作業から始まるし、最後までそれでしかないとも言えるのだけれども、そういったコンポジションとかカラージュは、配置される要素それぞれの文脈が異なれば異なるほど、それが配置される平面自体へ指向が働き、例えばとかグラフィックデザインにおける、グリッドシステムのような、単一でメタレベルな文脈を必要とし、それを生み出してしまふ。つまりそれは、目覚めることで夢を相対化してしまつて、ランダムなイメージの連なりという、夢の一般的な理解にとどまる事と同じだ。そうではなくて、配置された要素それぞれが、それ独自の文脈や運動が維持されたままコンポジション、カラージュされなければならぬ：わけではないが、そうでなければ「面白くない」

のだ。だから、慎平君いわく真のシニールレアリストは

「誰だっけ、あの小説書いてた」

「えつと、ほら、押井守のイノセンスでサイボーグのメーカーの名前に使われてた…『ロクス・ソルス』!」

「それは、作品名で、名前なんだっけ…まあ作品わかるからいいか」

それから一時間くらいたつてから突然慎平くんが名前を思い出して、もう別の話をしていたのを遮りながら

「レーモン・ルーセルだ!」

「時計が溶けたようになっていたり、空間が歪んだりするのは、単に表象を夢っぽくしたエフェクトみたいなもんでしかなくて、レーモン・ルーセルは、言語がもつ独自の論理で書いていて、構造的に夢に近い気がすんだよね」

「そういう作品が、文章じゃなくて絵とかで作りたいけど、やり方はまだわかんない」

夜の九時ごろになると、もう一通り話しておきたいことは話しきつたような感じになるくらいに、やや疲れてしまつてお開きとなつた。荻野と慎平くんはJRだったので、谷口は途中で別れて西武新宿駅に向かつて歩いていった。帰りの電車の中で、今日話していた事を反芻するように思い出していた。慎平くんが話していた、夢とか明晰夢についての話は、一緒にアトリエを借りていたころから何度か話していたことで、二〜三年経つても考えていることの中にはそんなに変化していないようにも思えたけれど、今日その話を久しぶりに聞いて、初めて実感を伴つて理解できた部分もあつて、以前よりもその問題の思考が深

まったように感じられた。慎平くんが今日話していた言葉は、もしかしたら二〜三年前とひとつも変わっていないかもしれないが、以前よりも「私」がそれを理解できるようになったのならば、それは慎平くんが考えていた夢の問題の考察が前進したとか、深まったと言えないだろうか。よく、頭の中だけで考えるのではなくて、「手を動かしながら考える」とか「話しながら考える」と言うけれど、たいいていの場合には「考えてばかりいないでさつさと実現しろ」とか「とにかくアイデアをたくさん出せ」くらいの意味でしか言われない。けれど、本当に「手を動かしながら考える」とか「話しながら考える」という事を確かに実感できる時があつて、それは今日の慎平君の話が以前よりも理解できたような時で、それはたぶん慎平君がずっと考えていた問題を「手分け」しているようなことなんだと気づいた。だから、同じ話でも、まだまだ何度もくりかえし話したり聞いたりしなければいけないし、そう考えれば、「手を動かしながら考える」ということも、もう少し確かに感じたり、考えられるんじゃないかと思えた。

### 3

谷口は家に戻ると、ノートパソコンを開いて慎平くんが最近作っていたFlash作品を改めて見直してみた。

（さつき慎平が今は全く最近作品を作っていないかのように書いていたが、本当は今Web制作会社に勤めていて、そこで覚えた技術とかを生かしてFlashとかjsで作品というか習作を作っていたのは先月、新宿で偶然会ったときに立ち話をしている時に聞いていたのだけれども、文章の流れでうまく書けなくなってしまった。すいません。さつき書いていなかったけれど、飲んだ時に慎平君からURLを教わって、その場でブラウザを開いて飲みながら観賞してたりしたのだ。いや、それにしても文章によつて描けなくなつてしまつたり、描きにくくなつてしまう物や事があるんだということ改めて実感しました。よかつたよかつた。人間、正直が一番ですね。）

<http://dxjonson.com/>

サイトにアクセスして、最初に表示されるFlash作品は去年の二月に公開したものらしい。画面内に配置されたテーブル、リング、皿などのオブジェクトは、ピントや大きさがゆつくりと変化していて、クリックすると別のイメージにモーフィングしていく。たとえばリングをクリックするとみかんになり、みかんをクリックすると卵焼きになる。何度もクリックしていくと、時々クリックしていないオブジェクトも変化してゆき、気づくと画面全体が全く異なる風景へと変わっている。とてもシンプルな仕組みではあるけれども、クリックしていない、意識の外にある部分まで変化していつてしまう様子には小さな違和感と驚きがある。それに、直接的かもしれないし、そこまでうまくいつているわけではないかもしれないが、それは慎平くんが繰り返し話してくれていた、夢の中の世界と近いふるまいのように思えた。

冒頭の画面では中央にテーブルが置かれている。テーブルは彫刻の展示台のように周りと

の空間を立体的に区切る役割があるし、テーブル (table) は、絵画そのもの、あるいは絵画の表面を指すタブロー (tableau) という言葉と語源が同じで、絵画内絵画のような二重の構造になる。一緒にアトリエを借りていた時に慎平くんが描いていた絵画でも、同じようにテーブル上の料理や食器がモチーフとなっていて、その時の作品から問題や思考が続いている。奥に見えるドアや窓も同様に、絵画内にもう一つのフレームを作り、画面の奥へ、あるいは窓ガラスが反射して何か像が映っていれば、画面の手前側への広がりとか、鑑賞者自身とか、そういう画面の外へと意識を向けさせる。荻野もドアや窓、鏡をよくモチーフにして絵を描いていた。しかし、このFlashでそれらのオブジェクトは、サイズが変わったり、ピントが変わったりして、それぞれの間に空間的な同一性を感じさせないカラージュ的な配置になっていて、ひとまずはそういった画面の外を指示するような効果は薄い。けれど、クリックを続けていくうちに、画面を囲う額縁のように水槽のアップや自動車のフロントウインドウなどが現れることで、鑑賞者の視点（というか、こちら側の存在のしかたみたいなもの）をダイナミックに変化させ、不安定になる。それぞれのオブジェクトのモーフィングの種類はかなり多く、画面上に現れるイメージの組み合わせは数百通りくらいはあるのではないだろうか。まだ酒が抜けてないせいかもしれないが、谷口は少々興奮した様子で、この慎平くんのFlash作品を妻に見せた。

「ふうーん、よくわかんないけどおもしろいね。つてかあんたもゴロゴロ寝てばっかりいないで何か作りなさいよ。小説は？すすんでんの？」

とかそんな感じで、妻がコミティアに出すためのイラストを描いているのを横目で見つつ、僕はまた慎平君のFlashをクリックしながらうとうと寝てしまつて、結局小説はたいして進まず、四月は終わろうとしていた。